

## 2015年 九州大学山岳部春山合宿報告

### ◆ はじめに

2015年3月14日から16日にかけて行った春山合宿について報告する

### ◆ 参加者

- 4年 中山湧貴
- 3年 中本裕哉 (CL)
- 2年 松村大輔、村松弾
- 1年 田中早紀、引尻貴俊

### ◆ 行動記録

3月14日 (1日目:村松) 八方池山荘～AC 天気:曇り時々風雪

- 7:00 白馬駅
- 8:15 白馬八方バスターミナル
- 8:30 ゴンドラリフト乗り場
- 9:35 八方池山荘
- 10:25 第二ケルン下
- 14:00 丸山ケルン下 (幕営地)

名古屋発の夜行バスで白馬に入る。夜行バスにも慣れてきたが、やはり快眠とはいかず、やや寝不足のまま白馬駅に向かった。駅からバスでバスターミナルまで行き、そこから徒歩でゴンドラ乗り場へ。さすが国際的なスキー場だけあって、周りはスキー関連の店が集まり一つの街のようになっている。ゴンドラリフトとリフト2本を乗継ぎ八方池山荘に着く。山荘前で身支度を整え出発(9:35)。出発してすぐに雪が深くなったのでわかんをつける。先日の寒波の影響か、積雪量が予想以上に多い。第二ケルン付近からは猛烈な風となり時々立ち止まりながら進んだ。尾根上を進むためルートは分かりやすいが、場所によっては膝までのラッセルがありペースは上がらない。丸山ケルン下の疎林帯まで進んだところで風雪のため視界が利かなくなる。時間的にも厳しくなってきたためここで幕営(14:00)。斜面を削って整地しテントを張ろうとしたが、強風でテントがはためき、なかなかポールが入らず悪戦苦闘した。結局1本はどうしても入らないので諦め、ポール3本でテントを立てた。外は風雪で非常に寒く、皆軽く雪を落とすだけでテントの中に転がり込んだ。積雪とい

い天候といい、ほぼ冬山と同じようなコンディションであった。テント内の雪を掻き出しようやく落ち着く。幕営開始からここまで2時間近くかかった。テント内での話し合いの結果、今回の積雪量や1年の歩行技術を考慮して五竜への縦走は中止し、唐松岳のみのアタックとする。17:00ごろ、幕営地近くの斜面で救助を求める男性を発見、テントに収容する。収容時はかなり疲弊していたがすぐに回復。風雪のため同行者二人とはぐれてしまったらしい。翌日の朝自力で下山するというので一晩泊めることになった。6人用テントで7人寝たためさすがに窮屈だった。夜は冷え込みが厳しかった。

3月15日(2日目:中本) AC~唐松岳~AC 天気:晴れ

6:30 AC発

7:00 丸山ケルン

9:20 唐松岳山頂

11:00 雪上訓練

14:30 雪洞作り

さすがに、6人用テントで7人寝るとするのは、なかなか狭かった。ろくに寝返りも打てず、テントの端で寝ていたせいか、背中が冷えて何度か目が覚めた。5時起床のはずだったが、目が覚めたからと、周りでは4時半くらいから朝食の準備を始めていた。構わず5時までシュラフで、うとうとさせてもらうことに。起床と共に、中山から自家製の煮豚の差し入れ。虚を突かれるものだったが、寝ぼけた頭でも、確かにうまいということは分かった。直後にお決まりの棒ラーメン(今回はしょうゆ味だったが、個人的にはとんこつ味の方が好きだ)をかきこみ、すぐに出発する。夜の積雪でトレースは完璧に消えていた。中本、村松は昨夜、救助した男性の下山のサポートのために15分程同行することに。その他のメンバーは、中山に指揮をお願いして、先にアタックをしてもらうことに。丸山ケルンは幕営地からも見えていた上に、ひざ上くらいのラッセルがあったので、すぐに追いつくと判断したためだ。ラッセルをさぼろうなんて微塵も思っていない。男性を見届けた後に、丸山ケルンを過ぎたあたりで全員合流。標高が上がるにつれて、尾根も痩せてきて、ところどころクラストした箇所や、ミックスも出てきた上に、風も強くなってきたので慎重に歩を進める。

山荘まで 200 メートルくらいの岩場にて、わかんを残置して、アイゼンを装着。今回は使用しなかったが、岩場には、3 か所ほどピンが打ってあった。ここで単独行の男性に抜かれる。驚くことに、駐車場を 2 時に出発してきたとのこと。山荘上部に到着して、一休み。左に五竜、右に唐松を従えと、目の前には 3 年前に早月尾根から登った剣が、独特の存在感を放って現れる。1 年生にあれが剣岳だよ、と教えたが、アタックの緊張感からのせい、もしくは、どれなのか分からないからなのか、あんまり反応が良くなかった。そして、いよいよ山頂を目指すことに。山荘を出てすぐに手すりのようなロープが無くなったので、滑落に気を付けるように注意する。一ヶ所だけ、いやらしいトラバースがあった他は、難なく登頂できた。私にとっては積雪期に踏む、初めての北アルプスの頂。思わず歓喜の声が上がる。山頂での大パノラマを楽しむと、程なくして写真撮影を済ませ、下山。中本一田中、中山一引尻でアンザイレンをして下ることに。山荘を過ぎると、登山者やスキーヤーの姿が、数にして 15 人ほど、尾根上にちらついて見えた。登山者の中には、ラッセルしてきた我々に、労いの言葉をかけてくれる方もいたが、スキーヤーは概して、挨拶もろくにせず無愛想だった。時間があつたので、テン場近くの尾根にて雪上訓練をした。ピッケルストップ、腰がらみ、肩がらみビレイ、スタンディングアックスビレイと充実した訓練が出来た。よほど珍しいのか写真を撮っていく人や、滑り台を滑っていていいですか、なんていう人もおり、無事に登頂できた安堵感による和やかなムードは、ひとしおだった。その後は、テントで休むという松村を除いて、雪洞を掘ることになり、全員でかわりばんこにシャベルでひたすら雪をかきだした。人一人が横になれるスペースが出来ると、中山が今夜はここで寝るとのこと。テントが広くなってありがたい限りだ。夕食をすますと速攻で就寝した。雪焼けで顔がヒリヒリと痛かった。

3 月 16 日 (3 日目:松村) AC~八方池山荘 天気:晴れ

5 : 5 0 出発  
6 : 2 0 第 3 ケルン  
6 : 3 0 八方ケルン  
6 : 3 5 第 2 ケルン  
6 : 4 0 八方山ケルン  
6 : 5 0 八方池山荘

8 : 0 5 うさぎだいら

8 : 1 3 ゴンドラリフト乗り場

8 : 3 0 八方インフォメーションセンター

夜中は強風であったが、起床した時間（午前4時）にはそれほど風は吹いてなくて、たまに強い風がごく短い時間吹く程度だった。テントを張っていた場所を出発する時には明るくなり始めていたのでヘッドライトは必要なかった。前日に多くの人が唐松岳の方向に登っていたので多少雪が積もっていたがルート自体は残っていて足場も固まっていた。八方尾根上では強風が吹き付けてきて歩行しにくい時もあったが、耐風姿勢が必要というほどではなく、また尾根では固まった雪の道だったこともあり全体てきに歩きやすかった。八方池山荘まで全員ワカンをつけたままで行った。斜面だと足元が固まった雪でワカンだときちんと踏みしめていかないと滑りそうでアイゼンの方が安全だったと思う。14日と比べると積もっている雪の量が減っていた。八方池山荘ではリフトがまだ動いてなかったため歩いて下山となった。スキークースの外側を行ったが膝下くらいまで足が沈んだので八方池山荘で外したワカンを再びつけることになった。スキークースに合流してしまい斜面も急なところもあったので尻で滑ってゴンドラリフト乗り場（うさぎだいら）まで下山した。ここからゴンドラリフトで下までおりた。

#### ◆ 係反省

（医療係：田中）

今回の合宿では、絆創膏2枚とカイロ3枚を消費した。要求があった際に、すぐ医療箱を出せたことはよかったと考える。今回の合宿に関しては、医療箱の中身は、適切であったと思われる。

（気象係：村松）

初日を除いておおむね天気は安定していた。これは事前の情報でも分かっていたことなので、天候の変化にはしっかり対処できたと思う。ただ、風の強さは予想外だったので次からは考慮に入れておくべきだろう。

（食料係：引尻）

今回の合宿の反省点として、三日目の朝食を麻婆春雨とスープにしたのだが、

これでは少し不足していると指摘があった。自分でも下山時に空腹を感じていたので今後はこれに白米を加えるようにしたい。またエッセンも全体的に不足していると感じたので冬春合宿では少し量を増やしたい。

#### ◆ 個人反省

(中本 裕哉)

当初の予定では、五竜までの縦走の予定だったが、事前の天気予報で天候が持つのが、入山日からの 3 日間、そして、例年以上の積雪により、初日に予定の行程の半分も消化できなかったことから、仕方なく唐松岳のみのアタックに変更した。下りてから落ち着いて考えてみると、多少のリスクを冒してでも縦走しとけば良かったのかなという気持ちと、無事に登頂できたから良かったじゃないか、という複雑な気分である。詳しくは、反省会でしっかりと意見を出し合いたいと思う。

現役としては最後の合宿となった。登山ド素人の私が、剣に登った 3 年前の夏合宿を思い出すと、精神的にも体力的にも、技術的にも少しは成長できただろう。計画書の抜けや、装備表のミスで 4 年の中山さんに指摘されたこと考えると、リーダーとしてはまだまだ未熟であるが。そして、素晴らしい先輩方や、経験豊かな OB に恵まれ、その人たちから私が教えてもらった数多くのことを、後輩に還元できただろうか。それは、今後の活動の成果で見せてもらえることだろう。2 年生、1 年生の部員達には、来年度からの活動をさらに高いレベルのものにしてもらいたい。

(村松 弾)

体力的には問題なかったと思う。しかし、初日の夜がテントの一番端で窮屈なうえ寒さであまり寝つけなかったため、2 日目のアタックの時少し疲れが出てしまった。また、アタックの時、クラストした箇所をわかんで歩いていたときにスリップしてしまい、もう少しで滑落する所だった。危険箇所ではないからと言って油断していたのが原因だろう。何もないところで事故は起こるということを再認識して、気を引き締め直したい。

(松村 大輔)

初日(14日)は行動するにあたり体力的には問題なかったと思う。しかし、いつものことながらこの日の夜にほとんど眠ることが出来なかったため15日

には相当きつかった。しかし、14日の夜はいろいろあって自分のところがマットとマットの間でテントにじかにシュラフだったので下から冷えてきてきつかったことが大きな原因だったと思う。あと、エッセンを行動中に十分にとっていないから疲れると思う。

(田中 早紀)

合宿までの事前準備やトレーニングが足りなかったことを痛感した。まず準備では、確認が甘く、ワカンを両方とも右足分で持ってきてしまった。出発準備に時間がかかり、先輩方を待たせてしまったことも反省点である。特に、最終日の朝は自身の支度に手間取り、テントの撤収に加われなかった。アイゼン・ワカンの装着を手袋のままで行えるように、個人練習をもっと重ねておくべきだったと思う。また、雪上技術は先輩にご指導いただいたことを忘れないようにしたい。今回の合宿で、私の最大の課題は基礎体力の欠如だと再認識した。山岳部の週末山行以外でも、日常的に体力作りに努めようと決意する。

この度、ほかでは絶対に得ることができない貴重な経験ができたことに、深く感謝している。新年度に向けて、先輩になるという自覚をもち、より一層励みたい。

(引尻 貴俊)

個人の反省点として、まずは装備の使い方の未熟さがあげられる。今回の合宿では初めて使う装備が多く、当日になって使い方がわからないものがあり、先輩方に迷惑をかけた。合宿の前に装備品を確認し、使い方がわからないものは先輩方に使い方を聞き、使った経験が少ないものは練習しておく必要があった。合宿への事前の準備が不足していたと思う。次に体力の不足が挙げられる。特に初日にばててしまい、パーティー全体のペースを乱してしまったことが大変申し訳なく感じている。この一番の要因としては合宿以前のトレーニング不足である。今後は合宿前だけでなく、個人的な山行でも歩荷を取り入れようと思う。二つ目の要因として初めての雪上歩行だったことがあげられる。これは今回の合宿で経験することができたので次回の冬合宿では経験を生かしたい。今回の合宿は個人的には今までの合宿の中で最も得たものが多い合宿だと思う。自分の不手際が原因で先輩方にしかられたことも多かったがその一つ一つが自分の技術の向上、また安全のためでありとてもためになった。また雪山の厳しさ・美しさも身をもって体験することができ良かった。次期上級生になることをしっかりと自覚し、今後は部活を引っ張っていけるような存在になるために

も、日々の努力を重ねたい。